

# 死別後3年目の追憶

— 妻と過ごした40年の歩み

Anno Kyojin

安茂興人

青山ライフ出版

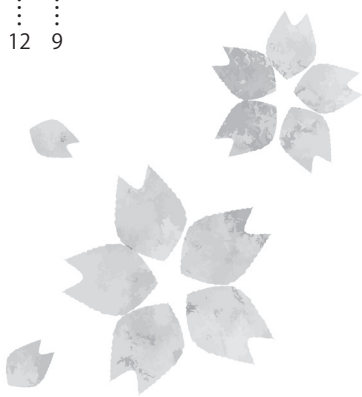
プロローグ

6

第一部 妻の闘病記

8

私に知らされなかつた妻の最初の癌の兆候	9
乳癌と確定診断される	12
妻にとって生まれて初めての大病の手術	15
再発まで	23
思いもよらぬ早いがん再発	24
不毛の癌化学療法	33
最後の旅行	43
ついに自分も妻の死を予感	46
ついに入院	49
逝去2日前入院からの悪夢の日々	51
最後の一日	53
つきつけられた死亡診断書	60



第二部 忘れえぬ妻とともに生きた思い出

62

いっぱい恋愛したのになぜか見合い結婚してしまった2人	63
結婚後小さな社宅に住んで、子供が生まれて	67
薬剤師として最高の人だった妻	72
家さがしをしていたころ、そして夫を先になくした夫人との出会い	75
二度目の家さがし	79
会社で駄目出しをされ失意で家庭をないがしろにしたころ	87
教育ママになってしまった妻	98
本社への転勤	102
研究所でも活躍できず	106
元上司の好意で望外の役職就任	108
再び本社へ転勤	109
我が身を振り返って子供の挫折感を顧みる	111
勤続30年表彰の場で転職を決意	117
外資で新しい文化を学ぶ	120

エピソード

遺言書に残された妻の生き様

死は永遠の別れ

乳房は女の命

129

135 133 129



死別後3年目の追憶  
— 妻と過ごした40年の歩み —

## プロローグ

私の妻は2016年6月、がんのため65歳の生涯を閉じました。それから3年と少し経った今でも妻の事は一日たりとも忘れることはありません。妻を思慕することは恐らく私が死ぬまで続くことと思います。もちろん一番強く記憶に残っているのは妻の癌と一緒に戦った5年8か月の闘病のことでしょうが、そのことを思い出すたびに妻が元気だったころの生活の事がスポット的に、あたかも相互に織りなす糸の様にからみあって思い出されるのはどうしてなのでしょう。其のいつまでたっても忘れられない追憶について、私の脳が老化して消え去ってしまう前に残しておこうと思ひましてこの本を書きました。したがって、この本は闘病記であるとともに妻との思い出の記録なのです。

私の社会の皆様との交流は、退職して今年で年齢も72歳となり、物故者も増えて少なくなりました。しかし今でも多くの友と年賀状であいさつを交わしています。それぞれの人々の年賀状を毎年見るにつけ、皆ご夫婦とも元気なことをうれしく思うとともに、我妻が病気とはいえこのよくな年齢で私を残して逝ってしまったことが、私の心に針のように突き刺さります。

何で僕達がと言う繰り言をいつまでも言い続ける自分に嫌気がさします。然し思い出は消える

## プロローグ

ことなくいつまでも私の心の中にあります。二人一緒だった時のことが散文詩の様に夢の中に出てきます。

自分の今のばらばらの心の状態を反映して、闘病記と発病までの二人の思い出の2部構成としました。

なお、最後にエピローグとして私の今の心境を書き綴っております。

第一部 妻の闘病記





私に知らされなかった妻の最初の癌の兆候

いつから癌細胞は妻の乳房に発生し、いつから乳頭を突き破り、いつから肺組織の間を占領したのか、私にはわかってはいません。妻が突然調子が悪いと総合病院に行ったときいきなり癌宣告を受けたからです。妻自身にとって異常はすでにその5年前からあったことを後から聞ききました。それから考えますに、おそらく最初の癌細胞が発生したのは遠い、遠い昔で妻が容色美しい40代のころだったのでしょうか。

私たちが最後の二人一緒に新年を迎えたとき妻は65歳、私は68才でした。私はもちろんの事、妻もそろそろ老年にさしかかっているので、予想外の異常事態と言うのは発症年齢的に言っておこがましいとは思っています。ただはつきりと病魔が妻の体を破壊しつつあると認識させられたのは、妻が還暦の60を迎えたころに癌が乳首に巣食っていると診断された時点でしたから、私にとっては「こんなに早く！」でした。病型はパジェット病と言うもので、乳腺深部に発生した腺癌が乳腺を伝って乳首に出てきたものです。類似の疾患にパジェット病というものがありまして、こちらは癌ではありますが比較的良形で病気の進展がパジェット病とは逆で、乳首から発症し徐々に乳房の中に浸潤していくタイプでした。この二つは病像として見た目が似ていますが予

後が全く違います。パジェット病は手術すれば5年生存が相当の高確率で保障されるものなので。この二つは病理診断で初めて区別できる診断の難しいものです。

「パジェット病であつてくれればよいが」

主治医はてらいのない良い人で検査結果が良かれと祈ってくれていました。然しその希望は病理診断によって無残に打ち碎かれたのでした。主治医と私の失望は非常に大きなものがありました。そういうことなら病気はかなり進展している可能性があります。手術で取りきれぬだろうか、転移はしていないだろうか。診断がついたとき主治医はしばらく無言でそれから気を取り直したようでした。曲がりなりにも手術が上手いことで定評のある医師で手術実績も十分であるので、状況は最悪だが自分の技術に賭けようと思ってくれたようでした。

なぜここまで見つからなかったのか。乳首に癌の兆候の出血が現れたのは今回受診したその5年前ぐらいのようでした。そのとき妻は近くの総合病院を受診しています。精密検査をした結果は乳首の糜爛及び出血以外は目だつた異常所見はなく、何か異常が発生しているものの典型的な癌所見はないので検査結果はグレーというものでしたが、この病型の症例の治療経験の浅い医師はまあ大丈夫だろうということをつぶやいただけのようでした。マンモグラフィや超音波であまり影が出ないタイプでしこりも形成しない。だからといってもいいのでしょうか、稀なタイプなので当時見てくれた医師に臨床経験がなく、これは癌であるというイメージがわかかったの

でしょう。医師は責められません。一番の失策はそういう症状が出たことを夫である私に妻が教えてくれなかったことか、妻の健康状態をしつかり見守ることが出来ていなかった私なのか。どちらでもでした。

当時私は転職したばかりで、妻は自分の健康不安で騒いで私の新職場への旅立ちを邪魔したくなかったのかもしれませんが。病巣が女性のシンボルという微妙な位置にあるということも言いたくない理由としてあったでしょう。さらに悪い事には、出血はしばらくして一旦止まったので妻は安心したのだろうと推定されます。それから再度出血が見られた5年あとまで病院を受診していません。膀胱がんなどでもよくみられますけど出血症状が出てからしばらくして、一旦その出血は止まってしまふことはよくあります。これで患者はなおってしまつたと安心してしまふのです。物事すべてが悪い方に回ってやがて妻と私の絆は断ち切られていくことになります。

もちろん初発症状が出た時私の知るところとなつたところで妻を助けられたかどうかは未だ持つてわかりません。しかし少なくともあのような早い年齢で永遠の別れを迎えることになりましたしなかったとは思います。物事には運命と言うものがあります。今となつてはこれも運命のなせる業と思ふしか仕方がないのではないかと考えています。

## 乳癌と確定診断される

二度目の出血の時診てくれた医師は慧眼で、「もしかすると問題があるかもしれないので大きな病院で見てもらいなさい」といったそうです。「問題があつたら手術をしないといけないかもしれない。あなたはまだまだ若いので失敗があつたらいけない。都心の技術の高い医師のいる病院でもう一度相談しなさい。80を超えたおばあさんなら細胞も老化しているしお迎えが近いから私が手術してもいいけど」その話は私にもしてくれましたのでそれを聞いたときは私の眼は点になりしました。癌とは明言していないが癌を疑っていることが私にはピンとききました。早速都内の大病院にあたりました。そこは乳癌学会の専門医の紹介状がないと診てもらえないので、乳癌専門医である私の会社の産業医に頼んで一筆紹介状をしたためてもらいました。その結果、めでたく初診患者として受け付けてもらいました。

この病院の専門医は直前診察を受けたあの総合病院から預かった検査結果をゆっくりと眺めました。それを見て先生は初め所見を一言も言いませんでしたけれど問題はないから帰宅してよいとも言いませんでした。紹介状の内容に癌を疑うので精査してくださいと記載されていたと思います。もちろん内容は改めていませんが専門医の表情でだいたいわかりました。「こちらで一通